国際関連情報　国際会議等

フランスANC主催 会計リサーチ・シンポジウムの報告

ASBJ 副委員長　川西（かわにし） 安喜（やすのぶ）

はじめに

2019 年 12 月 19 日、フランス・パリにてフランスの会計基準設定主体である会計基準局（ANC）主催の会計リサーチ・シンポジウムが開催された。今年は「会計と長期（long-term）」をテーマに議論が行われ、フランスの学者による論文の発表、論文のテーマについてのラウンドテーブル、及び論文のテーマに関するスピーチが行われた。ラウンドテーブルの参加者やスピーカーとして、日本を含む各国の会計基準設定主体の代表も招かれた。議論はフランス語又は英語で行われ、同時通訳が提供された。

スケジュール

スケジュールは以下のとおりであった。

- 開会の辞
- 「短期」のバイアス：神話か現実か
- 「Too Little, Too Late?」リスク会計の課題
- 貨幣の時間価値：割引の課題
- 財務情報以外の情報（extra-financial information）：期待への回答となるか？
- 最終ラウンドテーブル：長期（long-term）に関する情報と公共の利益（public good）
- 閉会の辞

「Too Little, Too Late?」リスク会計の課題

日本は「『Too Little, Too Late?』リスク会計の課題」のセッションのスピーカーに招かれ、筆者が報告を行った。

ラウンドテーブルの議論の対象となったのは 2 つの論文であった。第 1 の論文は Pierre Astolfi 氏（パリ第 1 大学）ほかによる「金融危機時の非流動性リスクは過小評価されているか？」と題するものであった。第 2 の論文は、Arnaud Thauvron 氏（パリ・エスト・クレテイユ大学）ほかによる「IFRS の下での価値評

価と割引率：フランスの市場にサイズ・プレミアムは存在するか？」と題するものであった。

これらの論文についてそれぞれの学者から紹介があったのち、ラウンドテーブルが行われた。論文の紹介をした学者に以下のメンバーを加えて意見交換が行われた（敬称略、順不同）。

- Benoit de Juvigny（フランス金融市場庁（AMF））
- Florence Didier-Noaro（フランス証券アナリスト協会（SFAF））
- Michel Rollier（Michelin 社）
- Charles-René Tandé（フランスの公認会計士団体（CSOEC））

最後に、筆者が論文のテーマに関して発表を行った。発表された論文が先般の金融危機の教訓が十分に活かされていないのではないか、との疑問を投げかけていたことから、IFRS におけるのれんの非償却は損失の認識が「Too Little, Too Late」であり、放置した場合には、次の金融危機が発生した時に数多くの企業が一斉に市場を退出することになり、会計基準設定主体が十分に対応していなかったのではないかと非難される可能性があることを個人的な見解として指摘した。

おわりに

フランスで行われるシンポジウムは、ここ数年、12 月に行われる会計基準アドバイザリー・フォーラム（ASAF）会議の前後に開催されており、ASAF に参加している各国の会計基準設定主体の代表を招いてきた。今年は、開催が年末に近かったことと、パリ市内でストライキやデモが活発になっていたことから、海外からの参加者の多くはロンドンからパリに移動せず、ビデオ参加していた。やや寂しいシンポジウムとなってしまったことは残念であった。